

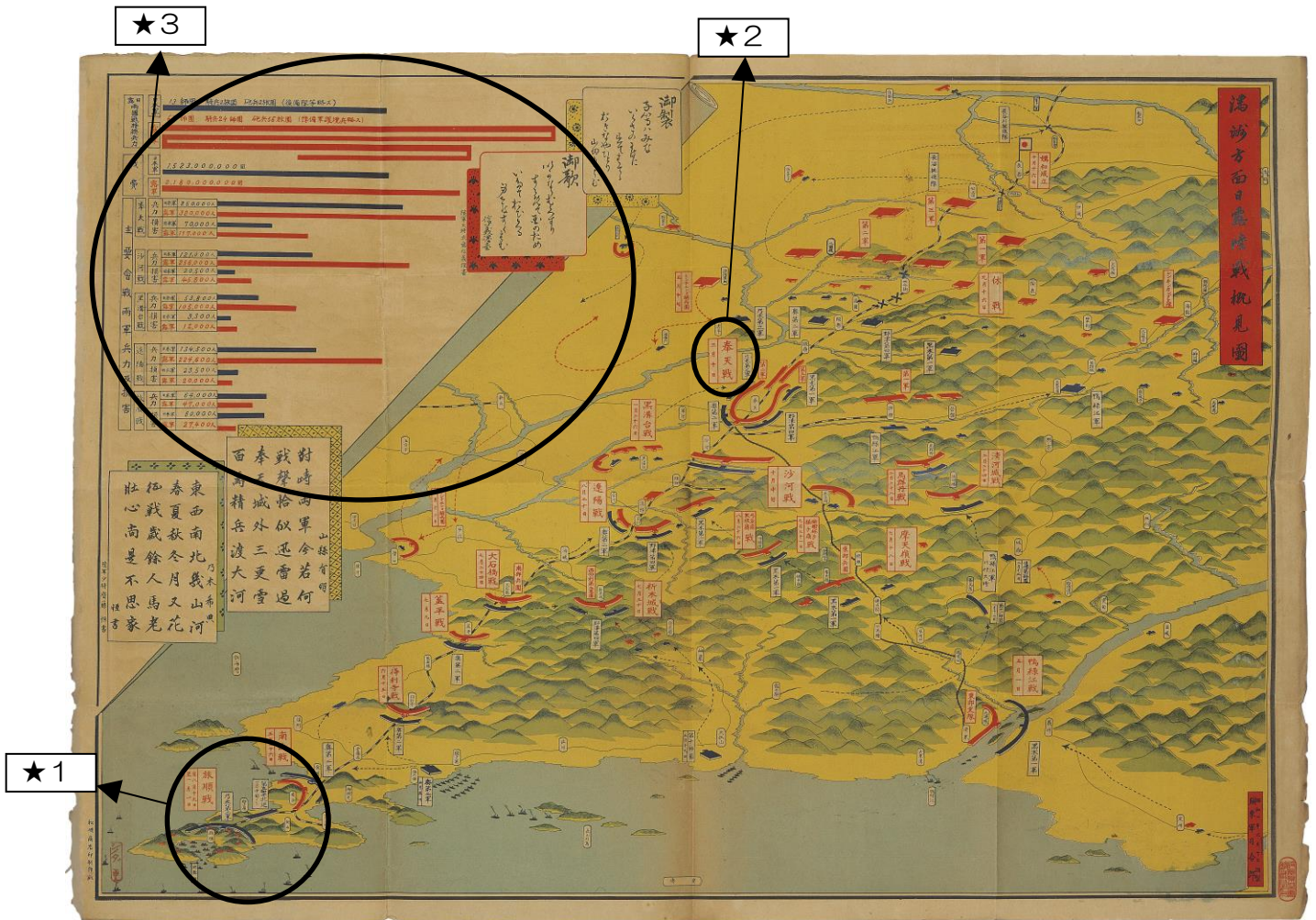
授業で使える当館所蔵地図

No. 86 『満州方面日露陸戦概見図』

作成年：1927（昭和2）年

サイズ：59×84cm

作者：関東軍司令部（調製）



【解説】

1904（明治37）年に海戦となった日露戦争における戦況見取図。軍の配置や月日も記されており、順序立てて日露戦争での日本軍・ロシア軍の戦いを理解することができる。また、局地戦における日露両軍の損失も記載されている。唯一、旅順戦において日本の損失の方が大きくなっていることから、旅順戦の意義を考えるきっかけにできる史料となっている。

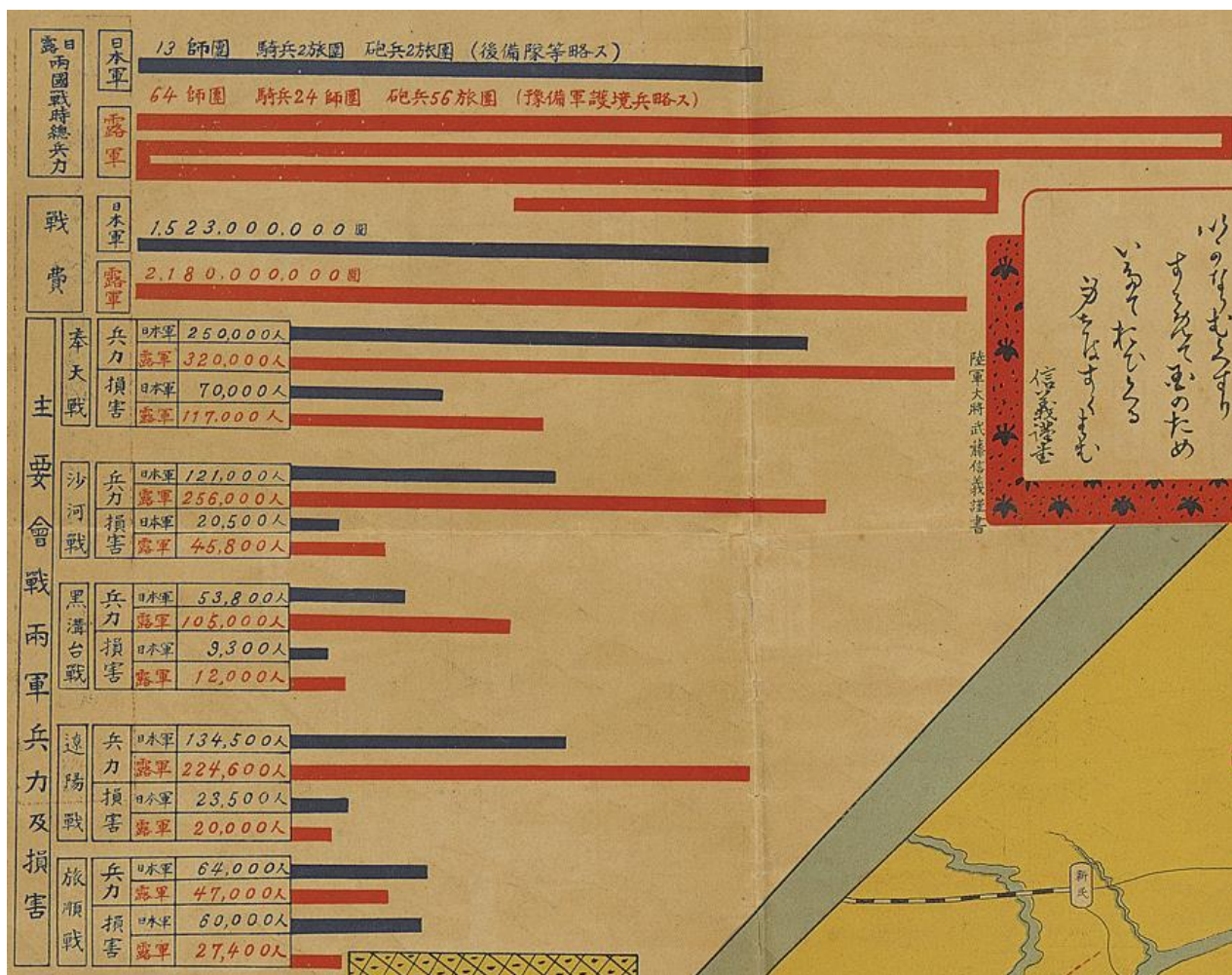
★1 旅順戦・閉塞作戦

旅順港にはロシアの第一太平洋艦隊が停泊しており、この艦隊は日本列島を脅かす存在として撃破することが求められていた。日本海軍はそれを目指したが、旅順港は自然の要塞となっており撃破することは難しく、旅順港そのものを閉塞する作戦も不発に終わった。そこで、日本陸軍第三軍はロシア陸海軍が立てこもる旅順要塞への総攻撃を行った。8月、10月と相次いで失敗した旅順総攻撃をみたび決行し、苦戦しつつも203高地の占領に成功して優位に立ち、ロシアの守備隊を降伏させ旅順要塞を陥落させた。そして、旅順港に停泊していたロシア艦隊に砲撃を加え、遂に降伏させた。

★2 奉天戦

日露戦争最後の大規模な陸上戦。満州の奉天周辺で大兵力を繰り出して激突した。この結果、両軍合わせて兵員10万人以上が死傷した。戦いは日本軍が有利に展開したが、ロシア軍が包囲網を脱して北に退却することを阻止できず、日本軍は消耗が激しく疲弊しており、追撃することができなかった。

★3 日露戦争における両軍兵力と損失



信義護衛
陸軍大尉 武藤信義 謹書

此の戦いもついに
すくなくとものため
いふやわいとう
力をなすいよむ

*日露戦争では兵力差が元々大きく、日本軍にとって厳しい戦いであったことを知ることができる。

【用語について】

・日露戦争（1904～1905）

幕末から続く欧米の外交圧力の中で、明治政府はロシアの侵略を想定しつつ外交を展開していた。対ロシアに備えるため朝鮮に開国を迫り、甲午農民戦争に端を発する日清戦争は、日本が朝鮮の主導権獲得を目指した戦争であった。そして、後の三国干渉や義和団事件によりロシアの満州（中国東北部）への侵略姿勢が明らかとなった。日本はイギリスの支援を受けたこともあり、世界の予想に反してロシアに勝利し、ポーツマス条約を締結した。敗北すればロシアによる日本の植民地支配の第一歩が刻まれたはずであり、逆に日本が大陸進出に舵を切ることとなった。まさに歴史の分岐点となった戦争であった。

【利用の例】

○日露両軍戦力差を知ることができる。

→この戦争の宣戦布告をした国は日本でした。ロシアの方が国力に分があるにも関わらず日本が戦争を仕掛けた理由を考えるきっかけとできる。

○日露戦争の過程を知ることができる。

→旅順戦での勝利が日本にとって必須であった。その後の日本海海戦での日本の勝利に繋がった。

○旅順の大まかな地形について知ることができる。

→旅順港の入り口は約90mしかなく、天然の良港であった。清によって築かれ、ロシアが占拠した要塞によって旅順港の海からの攻撃および閉塞作戦は難しいものであった。

